



深
 情
 訓
 女
 今
 川
 仁

13
 1825
 1





門 へ 13
號 1825
卷 1

へ 13
1825
15

Small red vertical stamp or mark.



松下流藏書

帝
 誠まことも多おほく悔くはなる慮おぼふを怨うらみ
 忍しのぶを辱はぢる法はを懼おそむもこと朝あの樂たのし
 公きみを歌うたを日ひくも憂うれひを小こ子こましを天下てんかを走はり
 易やす氣き剛がうなれをすあト行い子こ難がたと宣のたまふ
 聖せい人の教おしを天下てんか國家こくがを治ちるりり一いち己己の系
 子こ行い姑こを備そなへるの及および女子にょしと之これを人ひとれと
 し〜い〜の世子せいしのつ〜の古ふる人の類たぐひも胸むね中ちゆう

塵器をとりあつて異なり次世子大和小学女
大學など人の道をやそげ物子卒業あり本を言
む辱したるハ女童を續書縫針を白編拵藝
もむるあそぐも親の手許まで習ひ是之成長は
浮世の家子嫁し是は少時親の恩を知りて
本を尊む是も伴物終日月やあそぬ善者
此も善しぬおまひとくもいとよきものなり

男て少少清く女子同くあり知ふよそのそ自
糸のこも深し居るまよそのなれば仮初の善
不善の戯をまよそのなつれ善悪邪正心報のこと
よりあつるを是なりと勧善く自悪を懼る
手本とせば貴賤の差別をありとせ路を歩に
易くもせしをれを兒女をおゆる國字文の中
より女今川と稱する各々今川不復の化を新
親子たちを以て婦女の教訓に少くあつるも教よの

何人の御事なる事を詳し御事なれども古
 世を行なれども兒女の弄と申すも少く脱子久し
 世の名をこの世より御事なれども小説も亦何人の
 筆すはこれなる事或志と申すも童蒙をおるん
 ども彼乃昔より今より今川より海へ
 筆紙なれども亦其の名を肩へて海へ
 但讀教訓女今川と題し御事なれども
 為紙三つ一直し御事なれども亦其の名を
 御事なれども亦其の名を

知りし孝節を

記すもの也

月隱舎主人

馬秋



お梅ん

おつち

山田五郎



おさん

後次郎

山田五郎



銀次郎

おゆき

金之助

からく

おたけ

新編 忠臣蔵

第五回



紅梅

淫情女今川卷之一

第一回

明治四十一年七月一日

執行弘道 氏寄贈



古人有謂夫妻猶如尾と人のかげでいふ事あるが
 こゝちの世又人の夏いふもなけれは夫婦の事
 如き御子の出来迄は是れ初なる故一大事は不
 成す事ありされど大極両儀を生す西儀
 陰陽を生ず陰陽夫婦を生す夫婦初なる親
 らざる事あり成すは子枝葉を已けり事あり

のこころをわきまは人の道の根本これ染
始とまらぬ詩未圓睡をおきて和ありて八雲がう
れ神祇をまじりてまじりてまじりてかまじりて男女の
道は人の在る所なりて命いのほど醜き三年二満
とて誹をさるる人ありてまじりてまじりてまじりて
有の中より男を女の義をまじりてまじりてまじりて
外子を通まじりてまじりてまじりてまじりてこれまじり
男は命へて天よりて女は地よりて天よりて地より
の意をまじりてて草木花鳥もまじりてまじりてまじりて
男子ありてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
天の御受ありてまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
の草花をまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
清七妹をまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
多し妹おほしきまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
根海棠を二ツまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて
を丸のまじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

方がよふつ進みますましますそんな事をいやらぬようらぬそれ
で大事だいじのあやこのあやさんなままのいふことか
いよいよなまのいふことかあつらんやか
さんさつ若衆わかしゅかうけつて思おもいい私わたしあは子こ成なて
いよいよいれでいあやさんな事をいふと思おもい
まるとたまつていそりやまの私わたしのま公こうたうたう連れん
よとあんの話わや二に人にいい思おもいい思おもいい思おもいい思おもいい
とん少せう官くわん物ぶつやがまたまたまままてかん菊きくのんんささのの出でま

たよがぬさんへ九く糸いの紋もんの付つかんかんざざををままつて
糸いともたもたたようよう嫁よめ礼れいのああ支し交か子こああいいままいいまま
あありり九く糸いののんんをを付つててささててああ出でままささつつてて先まへ
の若わ思し那なののややままももちちををああややささだだろろののここををああん
ぢぢんののいいややいいままががううああくく持もててままささつつてていいままいいまま
よよととままををいいふふををああののよよああままここととままいいふふああつつけ
年としののああままととままのの神かみののははままををせせいいよよ年としののああままとと
か念ねん仏ぶつががううりりよよ鬼おにのの念ねん佛ぶつははままををいいふふととままいいままいいまま



友次郎もこまのりー西原
 紙を明も着子二人の印の
 小まのりしてと志のぬあま
 形も一若旦那の西新造の
 おまのり入るせらまのり
 つたうます後カトリのまのり
 わる出の紙のいびと出の紙
 せらまのりいびと出の紙



浮世丸圍へ糸のますよアイト
 いろの汁り出の紙の月徳
 とおせん子惚れいふまのり
 おまのりの方のり出の紙
 女房の置あやまのりのやま
 といふ江戸糸巻のいの紙
 のよぶのを幸ひは産後へ糸
 うえれがたまの母の相手を

せび床の名の札より湖月抄をとりてらんる飛
かま^後さい^{マサキ}中町へちつと泊りし由けいし^{マサキ}い^{マサキ}あ^{マサキ}がたふ
こぶりますの幸町もけい^{マサキ}庭の善法でこぶります
糸^{マサキ}も^{マサキ}それ世孫子なりますう^{マサキ}マ^{マサキ}糸^{マサキ}の^{マサキ}ま^{マサキ}ま^{マサキ}い^{マサキ}ト
い^{マサキ}折^{マサキ}く^{マサキ}幸町より足袋を大病のより告げますけい^{マサキ}び
血^{マサキ}の^{マサキ}ま^{マサキ}あ^{マサキ}ん^{マサキ}ど^{マサキ}られねと^{マサキ}志^{マサキ}た^{マサキ}う^{マサキ}く^{マサキ}様^{マサキ}や^{マサキ}か^{マサキ}う^{マサキ}
せん^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}や^{マサキ}く^{マサキ}く^{マサキ}や^{マサキ}ら^{マサキ}ち^{マサキ}く^{マサキ}幸町へ糸^{マサキ}ま^{マサキ}く^{マサキ}ん^{マサキ}
より^{マサキ}い^{マサキ}ます^{マサキ}く^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}や^{マサキ}ち^{マサキ}く^{マサキ}高^{マサキ}く^{マサキ}泊^{マサキ}り^{マサキ}か^{マサキ}ん^{マサキ}じ^{マサキ}や^{マサキ}
志^{マサキ}く^{マサキ}ま^{マサキ}ま^{マサキ}せ^{マサキ}く^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}や^{マサキ}ち^{マサキ}く^{マサキ}い^{マサキ}ん^{マサキ}と^{マサキ}い^{マサキ}ふ^{マサキ}志^{マサキ}く^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}や^{マサキ}
ま^{マサキ}い^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}く^{マサキ}支^{マサキ}度^{マサキ}そ^{マサキ}の^{マサキ}幸^{マサキ}町^{マサキ}へ^{マサキ}こ^{マサキ}ま^{マサキ}え^{マサキ}く^{マサキ}ま^{マサキ}ぬ

第二回

秋^{マサキ}く^{マサキ}か^{マサキ}ま^{マサキ}さい^{マサキ}幸^{マサキ}町^{マサキ}へ^{マサキ}急^{マサキ}ぎ^{マサキ}ゆ^{マサキ}り^{マサキ}く^{マサキ}見^{マサキ}る^{マサキ}ま^{マサキ}法^{マサキ}せ^{マサキ}い^{マサキ}の
外^{マサキ}の^{マサキ}大^{マサキ}病^{マサキ}あ^{マサキ}く^{マサキ}い^{マサキ}ら^{マサキ}く^{マサキ}手^{マサキ}を^{マサキ}つ^{マサキ}く^{マサキ}く^{マサキ}養^{マサキ}生^{マサキ}ま^{マサキ}す^{マサキ}け^{マサキ}い^{マサキ}が
も^{マサキ}終^{マサキ}子^{マサキ}世^{マサキ}年^{マサキ}を^{マサキ}て^{マサキ}却^{マサキ}と^{マサキ}く^{マサキ}途^{マサキ}途^{マサキ}の^{マサキ}病^{マサキ}と^{マサキ}消^{マサキ}へ^{マサキ}決^{マサキ}し
い^{マサキ}急^{マサキ}父^{マサキ}母^{マサキ}の^{マサキ}な^{マサキ}げ^{マサキ}ま^{マサキ}い^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}も^{マサキ}更^{マサキ}なり^{マサキ}目^{マサキ}に^{マサキ}く^{マサキ}な^{マサキ}い^{マサキ}の^{マサキ}ま^{マサキ}
見^{マサキ}え^{マサキ}な^{マサキ}れ^{マサキ}ば^{マサキ}か^{マサキ}ま^{マサキ}さい^{マサキ}い^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}も^{マサキ}死^{マサキ}な^{マサキ}ら^{マサキ}ず^{マサキ}ま^{マサキ}い^{マサキ}ち^{マサキ}も^{マサキ}熱^{マサキ}を^{マサキ}ま^{マサキ}さ

人いふに、かゝるまじい同の内へ入りて夜を引かざり行
来りしこの夏を業トし清七は父母よりまじくもか
まを鞠町へ返すは縁を由りしまよと迷言子
まのせとびより父は度惚を途へかまよめ聲小
せんと相法極るの翹在場の書い清七を母秘
翁へけまじかを落し是も秘あく又亡人の秘子
今けまじい家内へ灯の消へるごとく歎き悲志む
ちう子翹在場へいつし下女のお姫とといふ女子
ちまをそ次の年男子出生なけまじい浪江市
と名づけめでいつしこけるなまお姫といひ首子
久表向の女ちれと月夜でいひ新造とどりて
ま梅結の信喜と上田のちまは信子の帯をむす
びまじいまのまじいおまじいおまじい
そんな子落し周知お出なるといひ病氣の出ます又
たうと鞠町の夏をいひ出しその夏よりなれまじ
よく考へていひ見しまじいかうと所いえしちまの出



Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written on two pages of aged paper. The script is dense and fills most of the page area. The right page contains approximately 12 lines of text, while the left page contains approximately 10 lines. The ink is dark, and the paper shows signs of age and wear.

いしを娘公のむすぢとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
けさ良方病もくしやまきしつとてはなすべしとてはなすべし
解つてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
業なきは情もいとほしき月夜のなをぬれまじし
とてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
の沼もく彼の三河國の八橋も新やと思ふ事なす
袖もくのも増る江戸紫の多きう深く舞うるおぬ
とてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし

たつとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
おもはせよとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
ある日あまのつとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
毎日出なすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
いとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
夏にさかすまはしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
男はとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし
ほめます^かとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべしとてはなすべし

度お出控せしむるはひしりて歎くや
けお着をおぬさんのの中をしせしめあぢやを
つて本町へまてか意深も一ッあやあぢのいひよ
お隣の大さなまじいのもつまぢおぬさんこれし新目好の
のうしりてまの行末を口實なまじい後
見やせんおぬさんのおまじりて毎日控びし
おぬさん市しりちおよびなせしけけいお出さし
しりてしりちおよびなせしけけいお出さし
およぶとらうしりてしりちおよびなせしけけいお出さし
おえなせし新たら代りま命をやりたしりて
たらう新それ何のたしりてしりちおよびなせしけけいお出さし
らう新それ何のたしりてしりちおよびなせしけけいお出さし
なやのやまぢ後それしりちおよびなせしけけいお出さし
なせし後今おまじりてしりちおよびなせしけけいお出さし
お持しりちおよびなせしけけいお出さし
しりちおよびなせしけけいお出さし

やら線香をたくやら観音経をよむおとちよ
 の目おまをいをいれい見じういせいひのういせいひひひ
 後次郎よあいよういとせきる洞のを流うんと
 どのうよおを多ひそれうむじい皆くおとちよせい
 まさいせんくマアくお侍なせいそれでいさういうく私わたくしの
 いよよふよふいよふいよふいよふいよふいよふいよふい
 や紙入の中よ茶のあうう持くはななと大さくお
 どのあうく洞くおぬいせんくおをくくくくくくくくくく
 まいよふよふいよふいよふいよふいよふいよふいよふい
 ばくおまおせんくおあをせんく後次郎の耳よは
 よせちいよなうくうくくくくくくくくくくくくくくくく
 顔を見えうううううううううううううううううううう
 持くうううううううううううううううううううううう
 雷もやと雨もやとやと踏くまめくいよをいよ
 ヤ新章くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 おとちよいかんくおとちよいかんくおとちよいかんくおとちよいかんく
 出す又も出す又も出す又も出す又も出す又も出す又も出す又も



いけいんてんてんあひ
 な男をなやうてんてん
 ちんてんてんあひんあ
 妻でも同てんてん
 男と女かくたんのてん
 うあう今てんてんあ
 ちんてんてんてんてん
 けいんてんてんてん

いけいんてんてんあひ
 な男をなやうてんてん
 ちんてんてんあひんあ
 妻でも同てんてん
 男と女かくたんのてん
 うあう今てんてんあ
 ちんてんてんてんてん
 けいんてんてんてん





1714

1714

